

## Chapter13 : 個人化された戦争に関するナラティブと歴史への関与を教えること (Personalised narratives of war and teaching engaging history)

小野創太 (広島大学大学院)

[d200149@hiroshima-u.ac.jp](mailto:d200149@hiroshima-u.ac.jp)

### 著者紹介



**Jacqueline Z. Wilson:** オーストラリア連邦大学准教授。オーストラリア史共同研究センターに所属。研究テーマは、遺産、国家によるケア、制度化 (Institutionalization)。主著は、”Prison: Cultural Memory and Dark Tourism”。本書で、オーストラリアの刑務所観光地に関する初の全国調査について記されている。([https://www.amazon.co.jp/Palgrave-Handbook-Tourism-Studies-Penology-ebook/dp/B071Z97RC5/ref=sr\\_1\\_1?dchild=1&qid=1633664740&refinements=p\\_27%3AJacqueline+Z.+Wilson&s=digital-text&sr=1-1](https://www.amazon.co.jp/Palgrave-Handbook-Tourism-Studies-Penology-ebook/dp/B071Z97RC5/ref=sr_1_1?dchild=1&qid=1633664740&refinements=p_27%3AJacqueline+Z.+Wilson&s=digital-text&sr=1-1)) (最終閲覧日: 2021年10月8日) 主な論文: Wilson, J. Z., Marks, G., Noone, L. & Hamilton-Mackenzie. (2010). Retaining a foothold on the slippery paths of academia: University women, indirect discrimination, and the academic marketplace. *Gender & Education*, 22 (5), 535-545.



**Keir Reeves:** オーストラリア連邦大学教授。オーストラリア史の講座を持ち、オーストラリア史共同研究センター (CRCAH) の所長を務めている。以前は、モナシュ大学 (メルボルン) のオーストラリア・国際観光研究ユニットのディレクターを務め、メルボルン大学 (オーストラリア) でも教育、研究に携わった。

([https://www.amazon.co.jp/Battlefield-Events-Landscape-commemoration-Routledge-ebook/dp/B016QMSI36/ref=tmm\\_kin\\_swatch\\_0?\\_encoding=UTF8&qid=1633671320&sr=1-2](https://www.amazon.co.jp/Battlefield-Events-Landscape-commemoration-Routledge-ebook/dp/B016QMSI36/ref=tmm_kin_swatch_0?_encoding=UTF8&qid=1633671320&sr=1-2)) (最終閲覧日: 2021年10月8日) 主な著書: Logan, W., Reeves, K. (2008). *Places of pain and shame: dealing with 'difficult heritage'*. New York: Routledge.

### 重要用語

- ・ presentism : 現在主義
- ・ personalise : 個人化する
- ・ depersonalise : 非個人化する
- ・ (grand) narrative : (グランド) ナラティブ
- ・ Historical Empathy : 歴史的エンパシー

### 感想・議題

- ・ 率直に面白い実践だと感じた。公文書の存在一点張りで修正主義言説を生み出す人々への対抗となる歴史教育にもなり得ると感じる。
- ・ 一方で、どのように非個人化されている資料から議論を呼び起こすナラティブを抽出すればよいのか。述べていることは理解できるが、そのための足場かけ等はどのように行えばよいのか。
- ・ 非個人化されている史資料を用いた日本の実践にはどのようなものが挙げられるか。

## ひとこと概要

・本節で問題としているのは、「現在主義と過去との距離感（エキゾチズム）をどのように調停するか」である。この問題は、特に文化資本が恵まれていない学生たちに当てはまってくる。筆者らは、'Adopt a Soldier'プロジェクトは、その解決のための示唆を与えるものであるとする。

## イントロダクション (pp. 180-182)

・本章では、オンラインのアーカイブリソースの可能性を探ることで、学生の個人の学習への参加を促し、テーマ全体への理解を深めることを目的としたプロジェクトの主要な理論的・実践的要素を説明する。

→教員養成課程の学生が将来的に中等教育レベルの歴史カリキュラム上で実践するためのモデルプロジェクトとなっている。

・ Wineburg (2001) : 「過去とのあらゆる出会いの根底にある緊張関係、つまり、理解しようとする人々との関係における親近感と距離感との間の緊張関係」 ⇨ 現在主義 vs エキゾチズム

➡歴史教師は、学校、大学のどちらで教えているかに関わらず、2つの「極」の間でバランスを取らなければならない。

→学習スタイルや能力が異なる学生、学問としての歴史に不慣れな（あるいは敵意を持っている）学生、社会経済的に恵まれない環境や地理的に孤立しているなどの個人的な背景から、文化資本が一般的に不足している学生に直面した場合、特に当てはまる。

## 地域的文脈における歴史 (pp. 182-183)

・オーストラリア・ビクトリア州の多くの学生は社会経済的に低い階層に位置している。

→さまざまな学習ニーズや能力に応じた教授法が必要となる。

➡場に根差した学習（place-based learning）やより個人化される（personalised）（そして時間のかかる）教育アプローチが重視されるべき。

⇨特定のカリキュラム領域の背景となる文脈を提示し、カリキュラムの基礎となる歴史調査を「個人化」し、一次資料の調査をインタラクティブに体験する機会を提供するために、一連の「実践的」プロジェクトを考案した。

⇨一般の人々の生活や活動より、支配者や著名人、戦争などの大規模な紛争に焦点を当てている。

## プロジェクト (pp. 183-191)

・本プロジェクトは、我々が 'Adopt a Soldier' と名づけたものである。大まかな学習分野は第一次世界大戦で、その中で学生たちは「戦争の意義とは何だったのか」という重要な問いに主に取り組んでいる。資料は、1.第一次世界大戦前の政治地図（1914年）、2.戦後1920年頃のベルサイユ講和会議によって画定された国家の境界線を示した同地域の地図、そして3.戦争に参加したオーストラリア人兵士の「人事書類」、つまり軍歴（US Army Medical Department n.d.）である。

→以下では、これら3つの資料の性質と関連性、およびこれら3つの資料間の概念的な関係を概説する。期待される学生の知的利益についても一部触れる。

### 情報源 1・2：地図 (pp. 183-185)

・継続的な議論を呼び起こす「パターン化された物語」(Wineburg, 2005)をどのように見つけ出し、呼び起こすか。

→地図が歴史的ナラティブを体現するものとして見ることは目新しく、明らかに異質だといえる。地図製作者は、地形、建造物、境界線などの位置を決定するために利用可能な技術・方法と、それらの要素に対する一般的な概念・解釈を統合したものであるという点で、その時々の世界観を反映している。

☞政治地図に内在する典型的な非人間化された「グランド・ナラティブ」(地図を別途確認)。2の地図上の象徴となる線や色は、1と同様に象徴的なものとなっている。

○生徒の最善の関与のために必要な好奇心を生み出し、深い歴史理解のきっかけを促進する「カルチャーショック」のような奇妙な感覚を促すことができるかもしれない (Wineburg, 2001: 10-11)。

### 情報源 3：兵士 (pp. 185-186)

・メルボルン郊外のコリングウッドに居住していたジョセフ・モールドン二等兵の軍歴について (National Archives of Australia n.d.)。彼は著者の縁戚に当たる。

・1917年2月2日入隊。2月19日、兵員輸送船バララット号に乗船、約9週間の航海の後、4月26日にイギリスに到着。航海がなぜこれほど長引いたのか、記録には残っていない。

・航海中のある時点で、些細な規律違反を犯し、追加の任務を課せられたことは記されている。

→軍法会議へ、1年の禁固刑の執行猶予。

更なる詳細としては、1918年10月のインフルエンザ・パンデミック。生還したが、戦争終了間際に病気にかかり、それ以上の活動はしていない。8月25日に腕に銃弾を受けて負傷しており、回復のために休暇を取っていたところ、入院する原因となる病気にかかる。

### 解釈 (pp. 186-188)

・3つの情報源をどのように考えるか。

○すべてが「制度的に」作成されたものと見なすことができ、主な特徴として、**非個人化**されている傾向がある。

➡「現在主義」とのかかわり。アクション映画、西部劇、犯罪スリラーは、いくらかの銃弾の傷は生存可能なだけでなく、身体への障害としては比較的些細なものであることを現代の世代に教えている (Boyle, 1996)。☞神話へ。ミクロの物語をグランド・ナラティブの中に組み込み、個人を純粹に組織のプロセス(この場合は第一次世界大戦に勝つため)の機能として表現するという、組織の目的の表現と見なすことができる。

### 有効性 (pp. 188-191)

・Seixas (1994)「学生は自らの歴史的知識のスキーマに従って、自らの歴史理解を構成する」

➡非個人化されたものに共感し、事実上、個人化することができるアプローチの必要性。

→オーストラリアの兵士の記録とナショナル・アイデンティティを結び付ける。さらに、オーストラリア人兵士個人と当時およびその後の世界の出来事とを結びつけ、戦争の影響を今日の「教

訓」と見なすことで、歴史理解の手段としてナラティブとアナロジーの双方の魅力が発揮される可能性がある。

### ☞ ‘Adopting a Soldier’

その内容について

- ・地図と軍歴の記録にアクセスする設備は用意される。
  - ・公式記録と彼のナラティブのギャップに気づき、記載されていない期間に何が起こっていたのかを想像する。
  - ・軍律違反については、兵士が権威を軽視していたことを特徴づける他の資料に照らして議論し、検討する。
  - ・ナラティブを個人化し、複雑にするために、テレビ番組 *Four Corners* を視聴する。
  - ・妻であるメアリーの官僚的な手紙も、それ自体を洞察し、家に残された人々（妻、両親、子ども、兄弟）の経験について議論や調査を行う。学生は特に、第一次世界大戦後の社会的発展が、その後の数十年間における社会での女性の地位の変化に貢献していたことを検証する。
  - ・ヨーロッパ戦線の兵士とモールドンの背景にあった国内の環境との間に概念的なつながりを持たせるため、1918年のインフルエンザの大流行を学習する。
  - ・モールドンの記録を扱った後、生徒たちはナショナル・アーカイブのウェブサイトをさらに探索し、自ら選択した兵士を特定し、「採用する (adopt)」ことを求められる。
- ➡**事実に基づく厳密な調査とクリエイティブな想像力、そして「歴史的エンパシー」(社会的・経済的地位、性別、職業などを考慮して、当時の典型的な人々の心に身を置く能力) が求められる。**

### 結論 (p. 191)

- ・過去に遭遇した人々の過度な親近感、疎外感や距離感との間の本質的なバランス (Wineburg, 2001: 5-6) を取るために、個々の学習者に過去を生き生きと伝える方法を見つけなければならない。
- ・本章では、歴史的に重要な出来事に参加した人物に焦点を当て、個人化できるアーカイブの旅に出ることで、これを達成しようとした。
- ・この旅は、戦前から戦後にかけての地政学的なナラティブを具現化した地図という形で提供される文脈上のリソースと並置され、「マクロ」と「ミクロ」の歴史の間の知覚的な統合を効果的に促進する方法で、可能な限り広い風景の中に個人を位置づけるものである。